


**カリブ海・ハイチ**

**カタツムリ料理、スコールに蛇の目傘**



サントドミンゴを飛び立ったばかりの飛行機は、30分もしない間に下降を始めポルトープランスの国際空港に着陸した。カリブ海に浮かぶイスパニオラ島の隣国土の国、ドミニカからハイチへの旅である。だが、目に映ってきた光景は、ドミニカや他のラテン・アメリカの国々とは著しい対照を見せていた。

街を走るバスは、小型トラックの荷台に長い椅子と屋根をつけて改造したもの。その荷台（乗客席）いっぱいには描かれた絵は、赤を基調とした原色美。そして乗客は全て黒人である。聞こえてくるのはフランス語かこちらの現地語・・・。

——そう、ここはフランスとアフリカの文化が混交した国なのだ。グアドループがフランスの海外県であるのに対して、ハイチはカリブ海で最初の黒人独立国。そういえば、メンバーの勧めで滞在中、かの「カタツムリ料理」  なるものを賞味するハメになったが、結構いけるものだった。

さて、こんな異なった文化圏にも妙法の種が芽吹いていた。出迎えてくれたピエール・チャーレスさん（40）は鉱山技師で同時にテレビのスポーツ担当のアナウンサー。この夜、メンバー宅で開かれた会合にも 7 時の番組を終えて駆けつけてきた。フランス語のほか英語、スペイン語も堪能。入信はパリで、御本尊を受持したのがニューヨーク、信心の薫陶を受けたのがオランダだったという。

キャサリン・デュナンさん。アメリカで入信したという彼女は、カリブ海の黒人の舞踊を世界で紹介してきた著名な元ダンサー。  かつてフランク・シナトラなど国際的な俳優とも共演している。その文化貢献をたたえ、アメリカのレーガン大統領、またハイチのデュバリエ大統領からも表彰された地元の名士である。

彼女の家は緑の木々に囲まれた大邸宅。会合のため、御本尊を移した大広間でいざ勤行となったとき、彼女のところへお手伝いさんが数珠をお盆にのせてうやうやしく持ってきたのには驚いた。

そのほか、外交官や画家など、すでに半年ほど前から勤行をしているという友など計 10 人が集い地区が結成された。それはまことに微小な数ではあった。ハイチはカトリックそしてアフリカのブドー教が根強い土壌である。そんな中で、これが歴史的な出発日となったことには間違いあるまい。新任のチャーレス地区部長は「いよいよこれからです」と温顔に決意をみなぎらせていた。ここにもまた一つ妙法の灯が・・・。



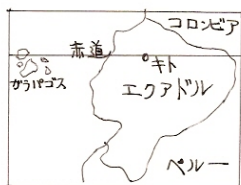
途中から土砂降りのスコールが屋根をたたき始めた。と、帰り際、デュナンさんがどこからか我々一人一人に蛇の目傘を持ってきた。アフリカ・

バレエの日本公演の際に買って来たものだという。ハイチは画家の国。街中の至る所で素晴らしい絵が売られている。それにしても、カリブ海のど真ん中の島のスクールに、蛇の目傘をさして歩く、これこそ文字通り絵のようなユーモアよ！（1985 記）

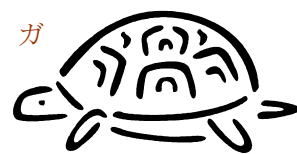
## ガラパゴス諸島

### 進化論の島で「ニッポン代表はワレー人！」と

エクアドル訪問の機会を利用し、ダーウィンの進化論で名高いガラパゴス諸島を訪れた。南米大陸から西に千キロ。赤道直下の太平洋上に浮かぶ同諸島は、エクアドル属領の火山群島で大小9の島と多数の岩礁からなり、地球の創世記をほうふつとさせるたたずまいを見せている。



総面積 7844 平方キロ。人口約 2 万人。ガラパゴスの名前はスペイン語の「亀」からきている。恐竜時代の名残を思わせるイグアナ（トカゲ）、甲が2メートル近いゾウガメ、アザラシの大群。至近距離に近づいても逃げようとしない鳥類。地球上でこ



こしか生息していないという貴重な生物——ユネスコは 1979 年、同諸島を「世界の財宝」に指定した。しかも今年にはダーウィンが諸島に上陸してから 150 周年に当たっていた。

地の果てのような過酷な自然。不毛の島に住む虫類やカラフルで美しい鳥類に、いくぶん興奮気味の自分を静めながら、私はレンズの交換ももどかしく、2 台のカメラのシャッターを押しまくった。

灼熱の太陽は溶岩の大地に容赦ない。同じ赤道直下にある同国の首都キト郊外の赤道記念碑のもとでは寒いくらいだった。海拔 2800 メートルと海拔ゼロメートルとの温度差は想像以上だ。額には玉の汗。高さ 5 メートルほどの広葉サボテンのもとに腰を下ろすと（実はこの下にもイグアナがたむろしていて、思わず足を踏み外したりして・・・）、進化論と仏法の関連を思索してみたりしたのだった。地球の生成以前から現存する宇宙の法。人類の誕生とその進化・・・。



宿舎に戻ると、同諸島最大のイサベラ島の火災の取材に訪島しているエクアドルのTVリポーターやアメリカ、ドイツからの旅行者など計 6 人と共にロン（ラム酒）を前に深夜まで討論が続いた。それぞれのお国自慢や慣習の比較も飛び出して「ニッポン代表はワレー人！」と私も“奮戦”——。



「カナダから救援機が到着したが、完全消火はきわめて難しい。溶岩でできた隙間のある台地に残った火種から、いつまた燃え出すかわからない。降雨が唯一の頼りさ」とリポ



一ター。島は2年続きの旱魃で乾ききっている。でも生物絶滅の心配だけはなさそうだ。

「ところで、明日から10日間、都合で島を結ぶ飛行便は小型機となり、相当数の帰り客が取り残しになるかも」との情報。「なぜだ！では増発便は？」などと考えるのは、いかにも甘い日本的な発想。これがラテン・アメリカなのだ。

とはいえ、忙しい身で、こんな太平洋の孤島に10日間も足止めされたのではたまったものではない。翌朝——祈りが通じたのか、危機一髪で搭乗セーフとなった。なんとロマンと冒険にとんだガラパゴス訪問であったことか！（1985記）